白山市

長竹遺跡発掘調査報告書

2009

石　川　県　教　育　委　員　会

(財)石川県埋蔵文化財センター

長竹（ながたけ）遺跡発掘調査報告書

2009

石　川　県　教　育　委　員　会

(財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は長竹遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は白山市（旧松任市）長竹町地内である。

3　調査原因は交通安全施設等整備一般県道矢作松任線であり、同事業を所管する県土木部道路整備課（金沢土木事務所）が石川県立埋蔵文化財センターに発掘調査を依頼したものである。

4　現地調査は石川県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて平成２（1990）年度に実施した。遺物整理は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成 18（2006）年度に実施し、報告書の刊行は平成 20（2008）年度におこなった。

5　調査に係る費用は県土木部道路整備課が負担した。

6　現地調査は平成２年度に実施した。面積・期間・担当課・担当者は下記のとおりである。

　現地調査期間　平成２年 11 月７日～同年 12 月 14 日

　調査面積　800㎡

　担当課　調査第一課

　担当者　主事 松山和彦

7　資料整理は調査部調査第３課が担当し、発掘調査報告書の作成・刊行は調査部県関係調査グループがおこなった。

8　本書の執筆は第２章を中泉絵美子（特定事業調査グループ嘱託）、それ以外を伊藤雅文（調査部県関係調査グループリーダー）がおこなった。また、石器に関しては、岡本恭一（県関係グループ専門員）の協力をうけ、土器に関しては久田正弘（企画部資料管理グループリーダー）の協力の下におこなった。編集は伊藤がおこなった。

9　発掘調査には下記の個人、機関の協力を得た。

　県土木部道路整備課、金沢土木事務所（現県央土木総合事務所）、松任市教育委員会（現白山市教育委員会）、長竹地区、中村繁和

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

　１水平基準は海抜高であり、T.P（東京湾平均海面標高）による

　２出土遺物番号は挿図と写真で対応する

目　　次

第１章　経　　緯 …… 1
　第１節　発掘調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　整理作業等の経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　遺構と遺物 …… 4
　第１節　調査の概要と基本土層 …… 4
　第２節　各調査区の遺構と遺物 …… 6

第４章　総　　括 …… 18

挿図目次

第 1 図　平成２年度調査区と既往調査区 …… 1
第 2 図　長竹遺跡位置図 …… 2
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 3
第 4 図　調査区位置図と土層柱状図 …… 5
第 5 図　1～3 区の遺構と遺物 …… 7
第 6 図　2 区出土遺物 …… 8
第 7 図　4 区遺構 …… 9
第 8 図　4 区出土遺物 …… 10
第 9 図　5 区検出遺構全体図と部分図 …… 11
第 10 図　5 区土坑出土遺物と包含層出土土器 …… 12
第 11 図　5 区包含層出土石器 …… 13
第 12 図　5 区およびその他調査区出土石器 …… 14
第 13 図　昭和 51 年調査区との合成 …… 18

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡 …… 3
第 2 表　出土遺物観察表 …… 17

図版目次

図版１　1 区全景／ 1 区建物跡／ 2 区全景西から／ 3 区全景西から／ 3 区中世土坑
図版２　4 区全景西から／ 4 区東端／ 4 区中世配石検出／ 4 区配石西から／ 4 区中世配石完掘／ SK402 号など
図版３　5 区全景西より／ 5 区全景土坑群／ 5 区全景ピット等／ピット 501 ／ピット 502 ／ SK501 ／ SK502
図版４　SK503 上面／ SK502・508 完掘／ SK503 ／ SK504 完掘
図版５　5 区 SK506・507 ／ 5 区 SK506 配石／ 5 区 SK507 周辺／ 6 区全景西から／ 7 区全景東から
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　出土遺物３

第１章　経　　緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

発掘調査は、一般県道矢作松任線交通安全施設等整備工事、つまり歩道を作る工事に伴うものである。一般県道矢作松任線の建設に伴う発掘調査及びその報告書の刊行を昭和51年度におこなった。本報告に伴う発掘調査はそれに一部近接する。

調査体制は以下の通りである。

所 長　橋本澄夫　　次 長　大西外美雄　　調査第一課長　平田天秋　　担 当　松山和彦（主事－当時）

発掘調査は、平成２年９月12日付文化財保護法57条の３第１項により、土木工事の通知が提出され、同年９月17日付で教育長名により県知事あてに発掘調査を実施するよう通知文書が返された。土木事務所より平成２年４月５日付で分布調査及び発掘調査の依頼が石川県立埋蔵文化財センターにとどき、10月18日付で法第98条の２第１項により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、発掘調査実施の回答を10月25日付で金沢土木事務所に出している。調査面積は800㎡である。

調査区の横に排土置場として幅数メートルの作業ヤードを土木側で確保してもらったが、既存の県道を保全した調査となったので幅１ｍ前後しか調査区域を確保できなかった。

現地の発掘調査は、0.1㎥のバックホーによる表土掘削、同時に作業員による人力掘削をおこなった。このような狭い調査区であったので、縄文時代の土坑や中世の墳墓を確認できても制約の多い調査となったのは残念である。

第２節　整理作業等の経緯と経過

平成18年度に記名･分類･接合から遺物の実測･トレースを作業を石川県教育委員会から委託されて、財団法人石川県埋蔵文化財センター企画部整理課がおこなった。整理体制は、以下の通りである。

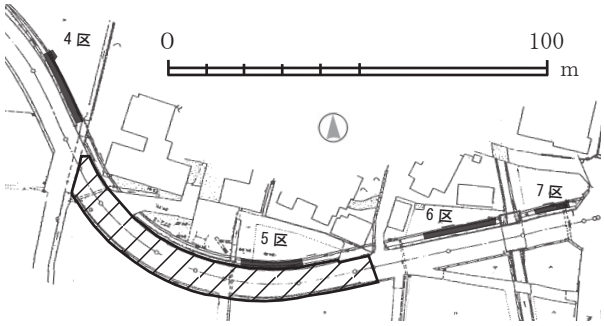
理 事 長　中西　吉明　　事務理事　前田　憲治

事務局長　山下　淳映　　所　　長　谷内尾晋司

整理課長　垣内光次郎　　担　　当　河村　裕子（班長）、山口　桂

遺物整理は、多数の石器とともに実測可能な土器が多く、発掘調査担当である松山が直接指導をおこなった。このとき、石器は実測図の二分の一で、土器は三分の二でトレースをおこなった。それは、二分の一縮小することで報告書の仕上がりサイズとなるからである。

報告書作成作業は、平成20年度におこなった。作業にあたっては、できるだけデジタル化しておこなうことで効率化をはかった。具体的には、遺物のレイアウトにＰＣソフトのイラストレータ（windows版）を使うのはもちろん、遺構トレースもすべてをイラストレータでおこなった。



斜線部分は昭和51年調査対象区域

第１図　平成２年調査区と既往調査区

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

長竹遺跡は、石川県白山市長竹町に位置する。発掘調査が実施された平成２年当時は石川県松任市長竹町であったが、松任市は平成17年２月に周囲の２町５村と合併し白山市となった。遺跡は、石川県内最大の河川・手取川によって形成された扇状地の扇央部に立地する。この扇状地では、手取川より設けられた七ヶ用水（富樫用水・郷用水・中村用水・山島用水・大慶寺用水・中島用水・新砂川用水）からなる用水網が発達している。長竹町近辺を流れるのはその一つの郷用水である。用水路は幾度か改修されたが、本来の水路は古来の手取川の本流・分流あるいは入川跡を利用して開設されたものという。（『手取川七ヶ用水誌』1982）かつての手取川は流れを七度変えたとの伝承があるほどの暴れ川であったが、上流にダムが建設され七ヶ用水が整備された現在、手取川扇状地は肥沃な穀倉地帯である。

第２図　長竹遺跡位置図

第２節　歴 史 的 環 境

手取川扇状地扇央部に人々が暮らし始めたのは縄文時代中期から晩期にかけての頃とみられる。扇央部は、地下水が得られにくい地域であり、地表水を利用するとしても手取川の氾濫がかなりの頻度で起きていた点から、初期は困難の連続であったと思われる。縄文時代晩期の周辺遺跡には乾遺跡、橋爪遺跡、粟田遺跡等がある。乾遺跡では手取川扇状地の礫を素材とした打製石斧が400点前後出土しており、これら大量の打製石斧は土掘具として使用されたのだろうが（岡本2001）、縄文時代晩期から弥生時代初期にかけての積極的な耕地開発に使用したと考える説もある（本田2000）。

弥生・古墳時代での扇央部の遺跡の分布は散在的である。自然湧水がある扇端部の低地には御経塚遺跡等の大きな集落遺跡が存在することから、礫が多く地下水位が低く、さらに水の浸透性が高いため自然灌漑が困難な扇央部は、稲作に向かず集落の存続が途絶えたようである。乾遺跡では弥生時代初期・中期にかけての遺構面に最大80cmに及ぶ無遺物の土石流の間層があり、その下面にも最大１mに及ぶ間層があることから、数度の洪水に見舞われながらもこの地で生活を営む人々の姿がうかがえる（三浦1992）。

奈良・平安時代となると、また扇央部での集落は増加しており、強力な政治勢力を背景に用水・河川整備等の大規模な開発されたとみられる。律令期に敷かれた国郡里制では、長竹周辺は拝師（はやし）郷（後に林郷となる）に関わると思われる。７世紀後半の白鳳期には、長竹より南約1.5kmの野々市町末松地内に法起寺形式の伽藍配置を持つ古代寺院・末松廃寺が建立された。８世紀半ばで一旦廃絶するものの、９世紀に再建され11世紀まで存続していたようである。末松廃寺の周囲には末松遺跡、末松Ａ遺跡、末松Ｂ遺跡、末松Ｃ遺跡、末松ダイカン遺跡、末松福正寺遺跡、大館館跡、末松しりわん遺跡、

末松信濃館跡、法福寺跡、末松砦跡、末松古墳、清金アガトウ遺跡等多くの遺跡が所在しており、この遺跡の密集地帯は、末松遺跡群と総称されている。

中世になると、手取川扇状地では耕作地の開発が進み、多くの村里が荘園や所領として支配・管理されていた。扇央部で中心的存在となっていた人物とみられるのは、林郷を本拠とする在地領主・林氏である。この時期の集落遺跡は、林郷の東側では粟田遺跡、西側においては三浦遺跡や橋爪ガンノアナ遺跡等が発見・調査されている。橋爪ガンノアナ遺跡では緑釉・灰釉陶器等が大量に出土し、有力者層が所在した、林郷での中心的な村であったことが推測されている（大西 2002）。

引用文献

手取川七ヶ用水誌編纂室編　1982 『手取川七ヶ用水誌』 手取川七ヶ用水土地改良区

中島俊一　　1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会

宮本直哉ほか 1991 『粟田遺跡』 ㈳石川県埋蔵文化財保存協会

岡本恭一　　2001 『松任市乾遺跡　Ａ・Ｃ区下層編』 ㈶石川県埋蔵文化財センター

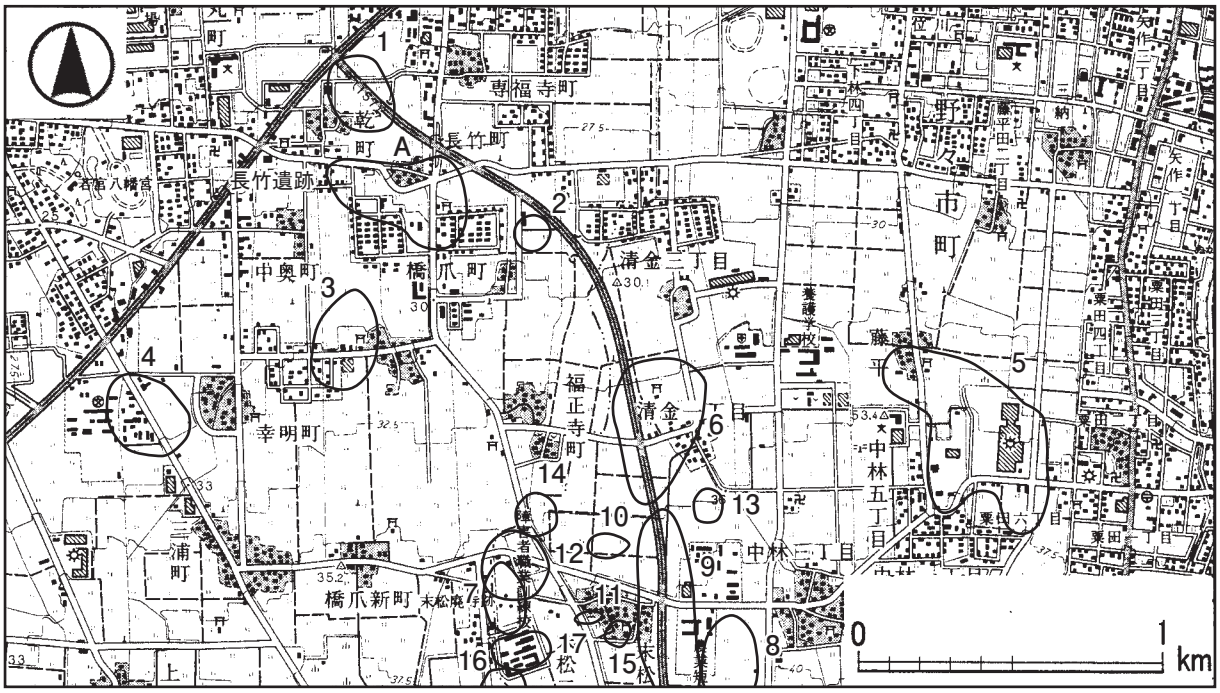
三浦純夫ほか 1992 「乾遺跡」『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報３』 ㈳石川県埋蔵文化財保存協会

本田秀生ほか 2000 『野々市町末松遺跡群』 ㈶石川県埋蔵文化財センター

大西　顕　　2002 『松任市橋爪ガンノアナ遺跡・橋爪Ｂ遺跡』㈶石川県埋蔵文化財センター

第１表　周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
A	長竹遺跡	白山市長竹町		9	末松A遺跡	石川郡野々市町末松・中林	縄文～中世
1	乾遺跡	白山市乾町	縄文～近世	10	末松B遺跡	石川郡野々市町末松	弥生・奈良
2	橋爪遺跡	白山市橋爪町	縄文・弥生・中近世	11	末松C遺跡	石川郡野々市町末松	奈良・平安
3	橋爪ガンノアナ遺跡	白山市橋爪町	奈良・平安	12	末松ダイカン遺跡	石川郡野々市町末松	縄文～中世
4	三浦遺跡	白山市三浦町	古墳・奈良～中世	13	末松信濃館跡	石川郡野々市町末松	中世
5	粟田遺跡	石川郡野々市町粟田・中林・藤平	縄文・奈良・平安	14	末松福正寺遺跡	石川郡野々市町末松・白山市福正寺	古墳～平安
6	清金アガトウ遺跡	石川郡野々市町清金	縄文～中世	15	末松古墳	石川郡野々市町末松	古墳
7	末松廃寺	石川郡野々市町末松	奈良・平安	16	末松砦跡	石川郡野々市町末松・白山市木津	不詳
8	末松遺跡	石川郡野々市町末松・中林	弥生～近世	17	大館館跡	石川郡野々市町末松	平安・中世(室町)



第３図　長竹遺跡周辺の遺跡図（Ｓ＝1/25,000）

第３章　遺 構 と 遺 物

第１節　調査の概要と基本土層

第１章でも述べたとおり、本調査区は昭和 51 年調査区に一部北接している。分布調査によって長竹遺跡の範囲が広がることが判明したので、西から１･２区・・と番号を付した。狭長な調査区なので、調査区ごとに遺構の検出の有無にかなりの差が出ている。検出遺構はほぼ縄文時代晩期と中世のものに限られている。現地形では、５区が最も高くて標高 24.4 m。東西に下がり地形となっているが、西のほうが緩やかである。各調査区で作成した土層柱状図により、基本的な堆積状況を観察する。

いずれの調査区も､表土･床土下には灰褐色土を中心とする中世の土器を包含する層がある。これは、１区では濁茶褐色土、３区では暗灰色土となっているがいずれも同じ性格と考えられる。中世遺構面は黄灰褐色粘質土下面となっており、この土層は再堆積した土と考えている（2・3 区)。この層は１区にはない。５区にはこれに相当する土層がなく、茶灰色粘質土や暗灰色粘質土がこれに相当すると思われるものの、中世に属する遺物の出土もなく遺構もなかった。昭和 51 年調査では中世遺構も検出していることから、縄文時代包含層上面に中世遺構が認められるはずだが、狭長な調査区のために検出できなかったと思われる。中世の遺構は、４区で墳墓遺構、１区で建物遺構を検出した。これらの間には南北に流れる旧河川あるいは沼地のような鞍部が存在し、100 mにおよぶ空間を埋めている。中世の遺構が分布している可能性が高い。調査区形状の制約から、中世遺構を確認できなかったのである。

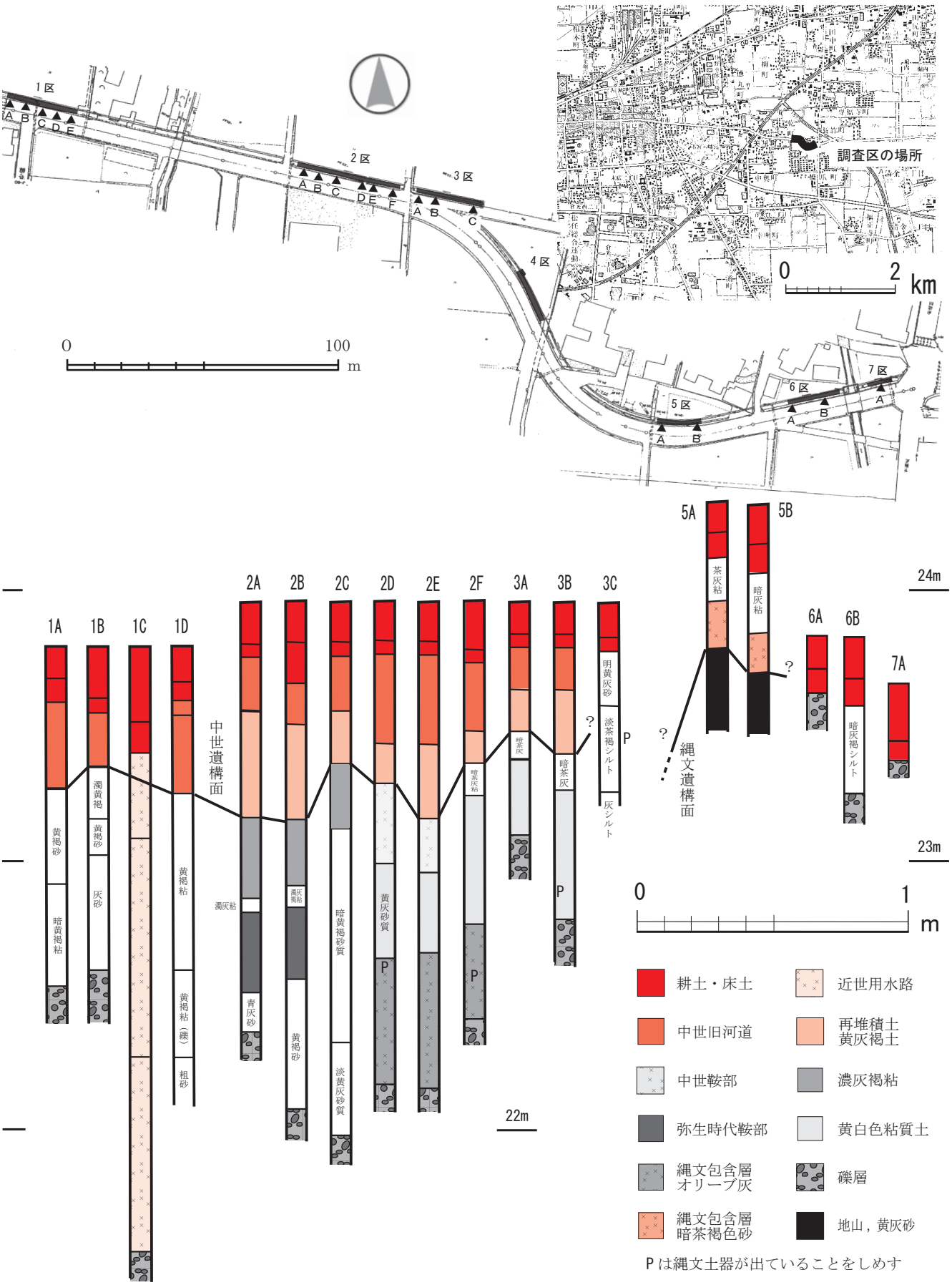
２区には暗青灰色粘質土が中世旧河道としてあり、その西側に濃灰褐色土や濁灰色粘質土、濁黄褐色粘質土がそれに連続するようにある。その下層のうち、西側には弥生時代鞍部堆積土としての黒色粘質土から青灰色砂・黄褐色砂があり、旧河道の一部であろう。つまり、下層は流水状況の堆積としての砂、上層はそのよどんだ状態での有機土層の堆積である。

中世河道より東側には３区で縄文土器を包含する黄白色粘質土がある。２区ではさらに下層にオリーブ灰色粘質土（2D・2E）や淡灰褐色砂質土（2F）がある。３区の黄白色粘質土は、地山としての礫層上に堆積しているが、２区は礫層が下がっていくためにその谷部分に堆積した有機土層である。2D から炭化物も出土している。縄文時代の鞍部にかかる位置に相当する。

このような土層は 2C 以西では見られず、集落域周囲をとりまく地形的に下がった部分に相当すると考えられる。

４区は、５区と３区の地形変換点にあたり、中世遺構面、弥生時代遺構面そして地山としての縄文時代遺構面がある。弥生時代の遺物分布は４区中心にあり、ピンポイント的な存在である。

手取川扇状地の堆積である礫層が西から東のほうに緩やかに高まり、中世と縄文の遺構が多数検出できた４・５区のベースが粘質土となっており、礫層の空隙にあたり、居住に適した地盤である。５区では、表土・床土下に間層があり、縄文時代包含層として暗灰色砂質土・暗茶褐色砂質土があって遺構面としての地山にいたる。６区に縄文時代包含層はなく地山も礫層となることから、遺構の分布はないと考えられる。



第４図　調査区位置図（S＝1/2000）と土層柱状図（S＝1/20）

第２節　各調査区の遺構と遺物

１区

長さ 26 mの調査区ほぼ中央に南北方向に幅 4.2 m、深さ２m近くの近世の用水路が検出され、その東西両側に中世の遺構を確認した。西側には溝状落ち込み（SD101）と土坑状落ち込み（SK101) を確認した。東側にはピット 101 ～ 103 からなる柱列を検出し建物跡（SB101）と推定した。さらにあと１間延びるかどうかわからないが、現状で２間確認し P101-P102 間 2.2 m、P102-P103 間 2.4 mの柱間である。SB101 と SD101 がほぼ直交することから、概ね同じ時代に属すると考えられる。

１は包含層出土で越州窯白磁碗で玉縁の口縁。透明感のある釉で貫入がはいる。11 世紀後半から 12 世紀初頭以降の年代。２は土師器皿で、糸切りの底部と思われるが不明確。口縁端部に面取り様になった小凹部となり、内側はやや内湾する。１と同じような時期であろうか。

３区

長さ 24 mの調査区で、東から 20 mに中世の土坑、中央から東側に鞍部を検出した。中世土坑は井戸と思われる落ち込みであるが、調査区に五分の一程度かかった状態であったので、掘り切ることはできなかった。埋土等から中世であることは確実だが、時期の絞り込みはできない。鞍部は暗茶灰色粘質土で東には暗茶灰色粘質土が下がって上層に明灰色砂質土があるので、鞍部の最深部にあたろう。暗茶灰色粘質土下には灰色砂となっており、この鞍部が旧河道であったと推測できる。遺物の出土もないので時期は不明確だが、中世ごろであろうか。鞍部西の礫上層の黄白色粘質土から縄文土器（3･4）が出土している。この層を包含層とするのであろうが、遺構面が礫層となり生活面としては不適であるので、下がり地形への堆積と考えられる。

３は壷口縁で内外面にミガキが施され、外面はより丁寧である。口縁端部にはきれいに面取がほどされている。４は浅鉢内面に幅５～ 7㎜の幅広い沈線がある。

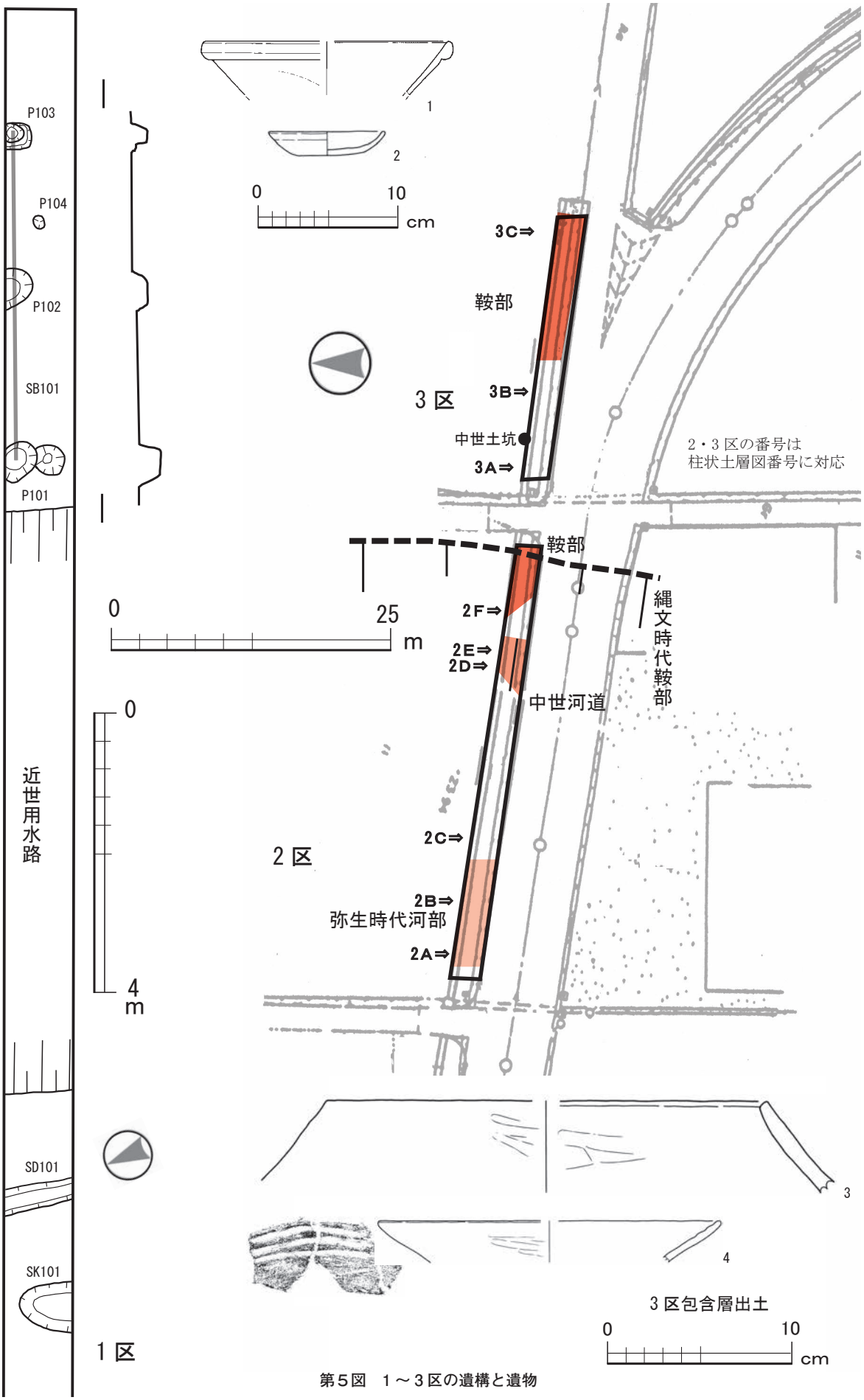
２区

長さ 40 mの調査区で、弥生時代後期、中世の流路および縄文時代鞍部を確認した。また、東端には中世以降の落ち込みも確認した。このように、安定した地盤ではない。弥生時代の旧河道は幅 10 m、深さ 75cm の規模で、下層にある砂層は恒常的に水が流れている状況を示し、上層の有機粘土層の堆積はその流れが緩やかとなって湿地に近い状況で草が繁茂する状況を示す。

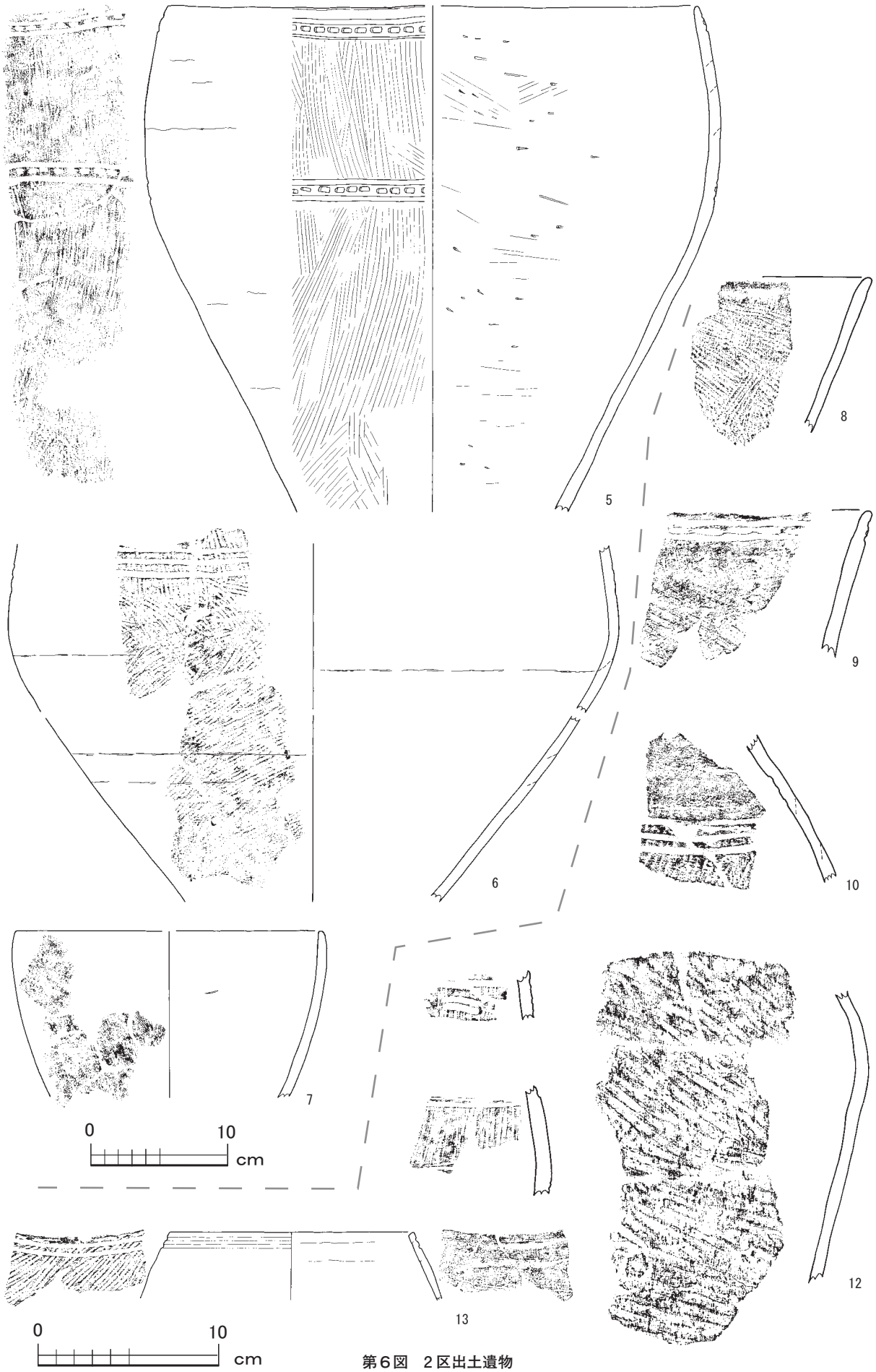
中世旧河道は幅３～５m深さ 30cm と浅く、暗青灰色粘質土が堆積している。具体的な遺物の出土はなかったが、埋土から中世と判断した。調査区東端の鞍部とした幅７～５mの落ち込みについても、同様の理解である。

縄文時代の鞍部としたのは、3 区から２区にかけて急激に地山が 70cm ほど下がる部分をさしている。この上面には黄灰色砂質土が 30 ～ 50cm の厚さで堆積し、3 区では縄文土器を包含している。2 区では、縄文土器がそれより下層のオリーブ灰色土層から出土しており、３区出土縄文土器と異なる層位である。縄文土器のほとんどが、東から 12 m前後の地点から出土している。底部の破片が最低８個体の確認ができた。全体的に大きな破片で、磨滅もないことからも、土器が本来的に使われた場所は、この地点からさほど遠くないところであると思われる。石器の出土はなかった。

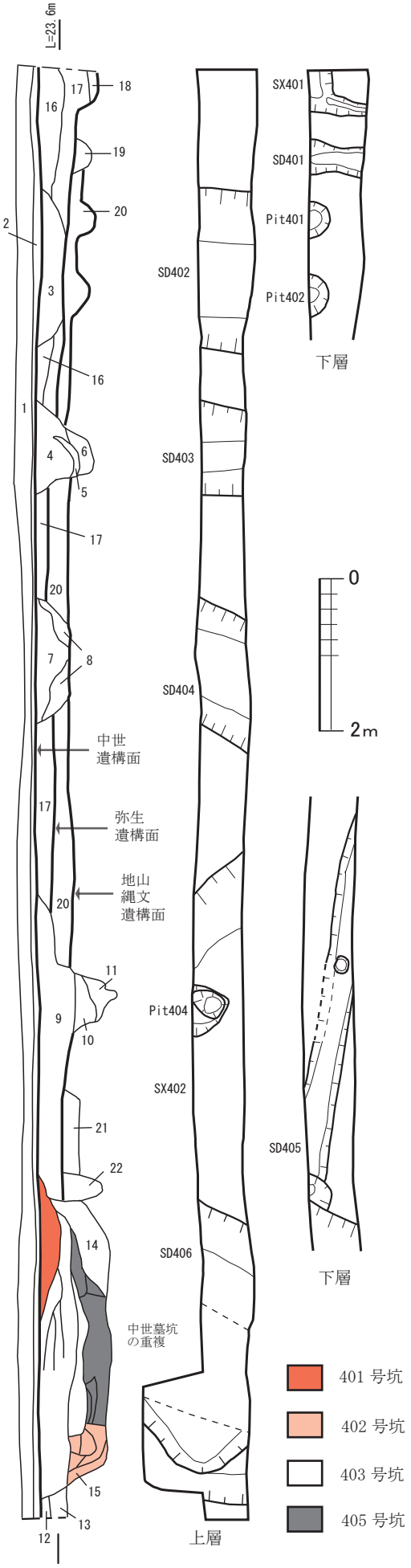
５・６は深鉢で、５は口縁直下と体部中央最大径付近に刺突文帯がある。内面にケズリ調整、外面に条痕が施されている。体部下半に煮炊きによる炭化物が付着し、外面では体部最大径やや下あたりに最も熱を受けて土器がもろくなっている部分がある。６は５よりも体部の屈曲角度が大きく、屈曲部



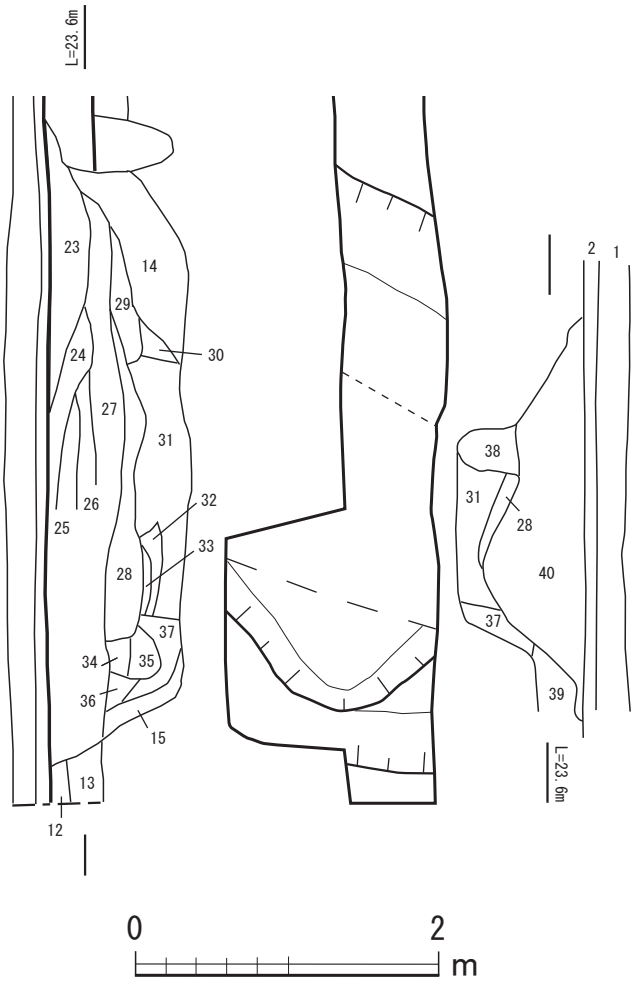
第５図　１～３区の遺構と遺物



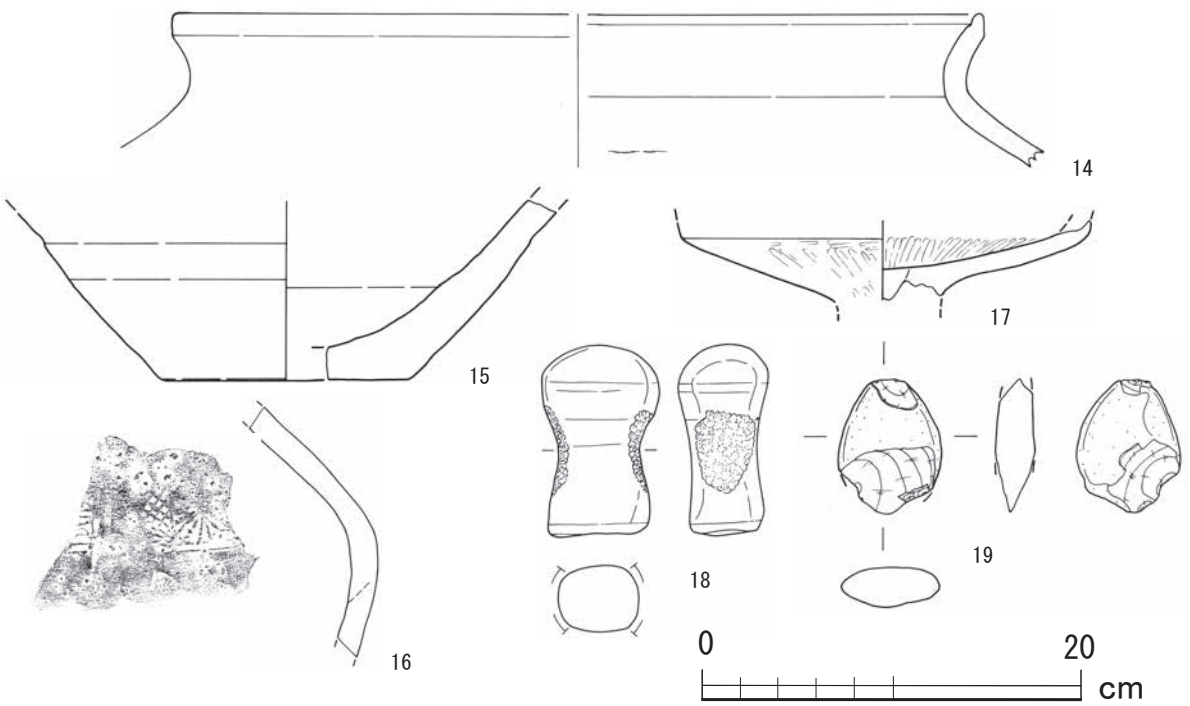
第６図　２区出土遺物



1、表土
2、床土
〇SD402
3、濁暗灰色土
〇SD403
4、濁茶灰色土
5、暗灰色粘質土
6、暗黄褐色砂質土
〇SD404
7、暗茶灰色
8、7 の土に黄褐色土ブロック
〇SX402
9、濁淡茶灰色土
〇Pit404
10、暗黄灰色砂質土
11、濁暗灰色砂質土
〇弥生包含層
12、濁暗茶褐色粘質土
13、濁暗黄灰色砂質土
16、淡茶灰色土
17、黒色粘質土
〇SX401
18、濁明黄褐色土に地山と 17 の土ブロック
〇SD401
19、濁茶褐色土
〇縄文包含層・Pit401 等
20、濁暗黄灰色砂質土
〇SD405
21、淡茶褐色土
〇Pit405
22、濃茶褐色土
〇SD406
14、暗灰色砂土
15、黄茶褐色土　401 号墓坑
23、濁暗茶灰色砂質土
〇403 号坑
24、濁茶灰色土
25、濁暗黄灰色砂質土
26、暗灰褐色土
27、濁暗灰褐色土
28、黄色祖砂
29、灰褐色土（灰混じり、やや粘性）
〇405 号坑
30、濁青灰色粘質土
31、青灰色粘質土
32、濁黄褐色砂質土灰混じり、やや粘性）
33、灰褐色粘質土（28 の土混じり）
〇402 号坑
34、茶褐色粘質土
35、濁黄褐色粘質土
36、濁暗黄褐色粘質土
37、濁暗灰色粘質土
〇404 号坑
38、濁灰褐色粘質土
39、濁淡茶灰色土
40、濁暗灰褐色



第７図　４区遺構（S＝1/80、1/50）



第８図　４区出土遺物（Ｓ＝1/4）

やや上に３本の沈線がある。外面では屈曲部よりやや下あたりにススを最も付着させ、それより下部に火熱を受けてもろくなっている。底部近くに炭化物が多く付着している。内面はナデ調整。7 は深鉢で口縁端部がかろうじて残されている。外面は火熱を受けているためか全体的にもろい。内面には口縁部近くまで炭化物の付着がある。内外面ともナデと思われるが、明瞭でない。

8 は深鉢である。口唇部の強いナデにより外側にはみ出して、沈線のように見える。内面は強めのナデによって砂粒の動きが見える。9 は深鉢で、口縁直下に２本の沈線とその間に連続刺突紋を施す。文様近くの条痕がナデ消されている。同一個体破片に内面に炭化物を付着しているものが多い。10 は壺の肩部である。3 本の沈線を境に、それより上部の条痕をきれいにナデ消している。11 は深鉢破片で２から３本の沈線をセットに文様を施す。上下２つの文様帯をもつようである。内面はナデ調整。13 は深鉢で口縁直下に２本の沈線を施す。内面が横方向のケズリの後きれいにナデられている。

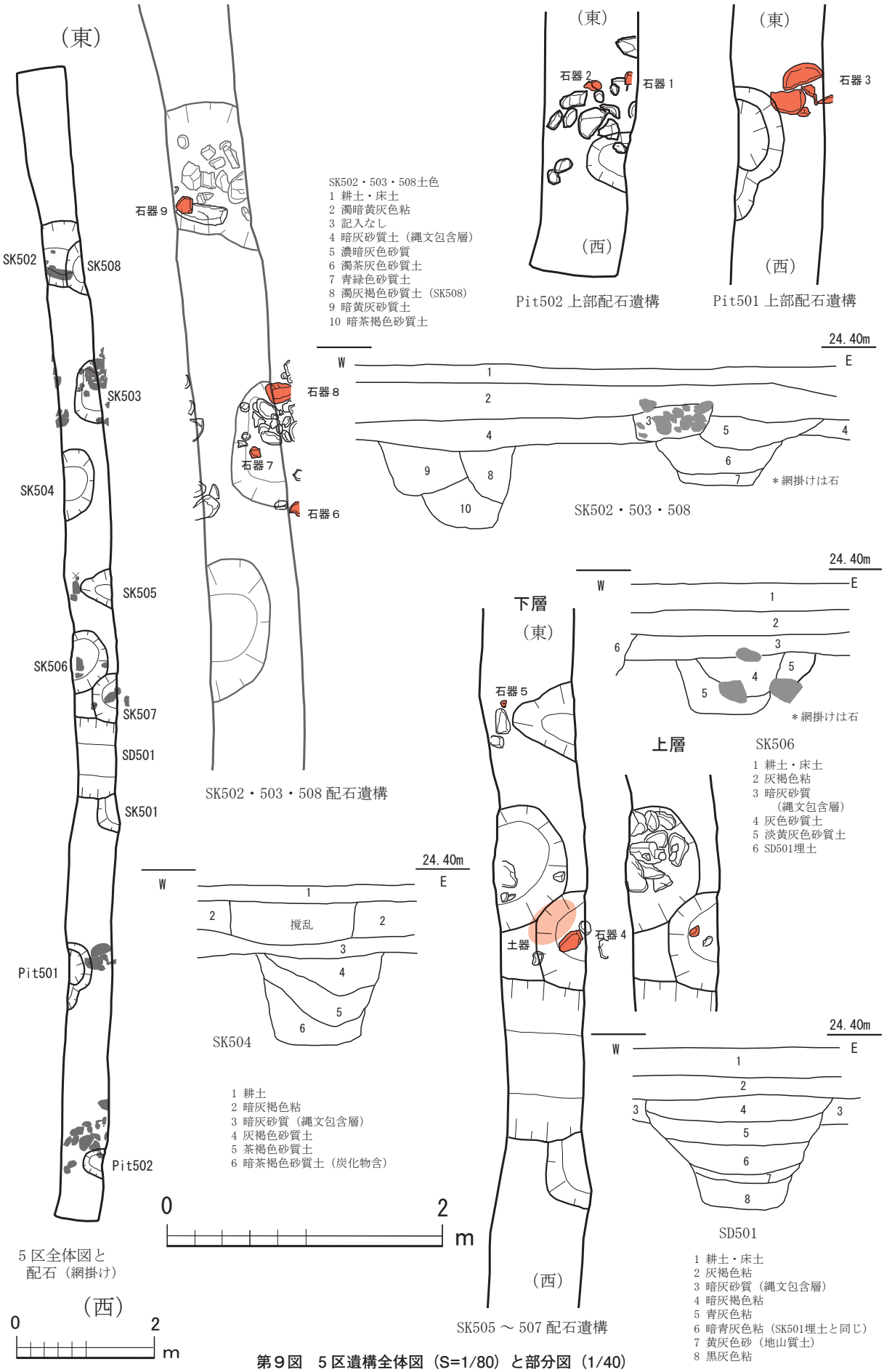
４区

長さ 19 mの調査区で、中世・弥生時代及びそれ以前の遺構面を確認した。下２面は地山まで下げて調査したので、中世遺構面を上層、それ以前を下層とし、下層遺構が存在する部分のみ平面図を作成した。上層遺構面は耕土・床土直下にあり、弥生時代遺構面は黒色粘質土を包含層とし、縄文時代遺構面はその下層にあたる濁暗黄灰色砂質土を包含層としている。

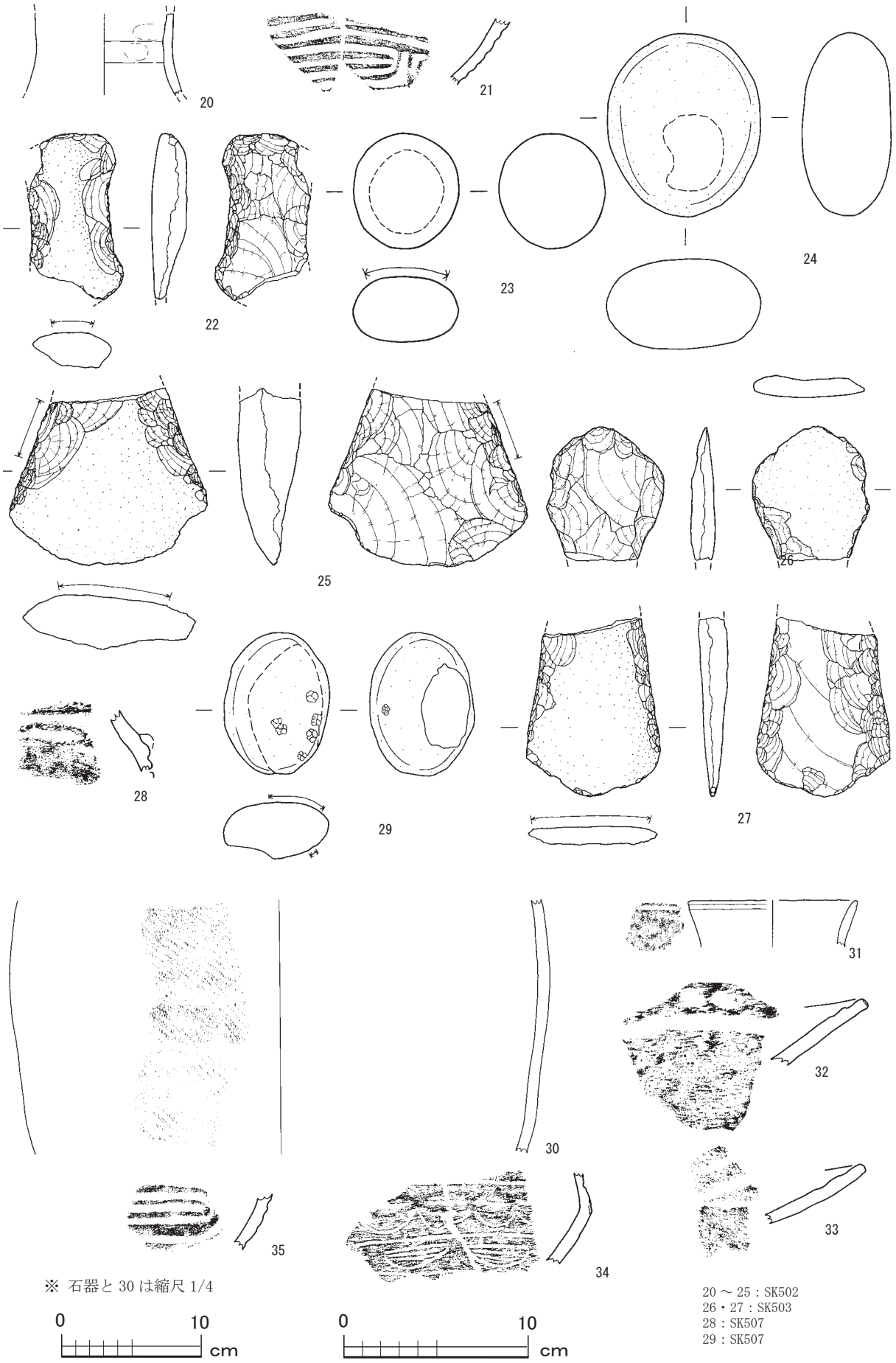
上層

SD402 ～ 404 の３本の溝と SX402 の落ち込み、その内部にピットおよび中世配石遺構を確認した。SD404 は幅 2.1 m、深さ 40cm で、濁暗灰色土を埋土とする。SD403 は幅 1.2 m、深さ 80cm で、下層に暗茶褐色砂質土、上層に濁茶灰色土となっている。これら２本は平行して検出されたが、SD404 はやや斜交している。方位がないので正確に合致できないが、ほぼ東西方向の溝であろう。幅 1.5 m、深さ 45cm で、最終埋土が暗茶灰色土、第１次堆積土としてそれに黄褐色土のブロックを含む層がある。

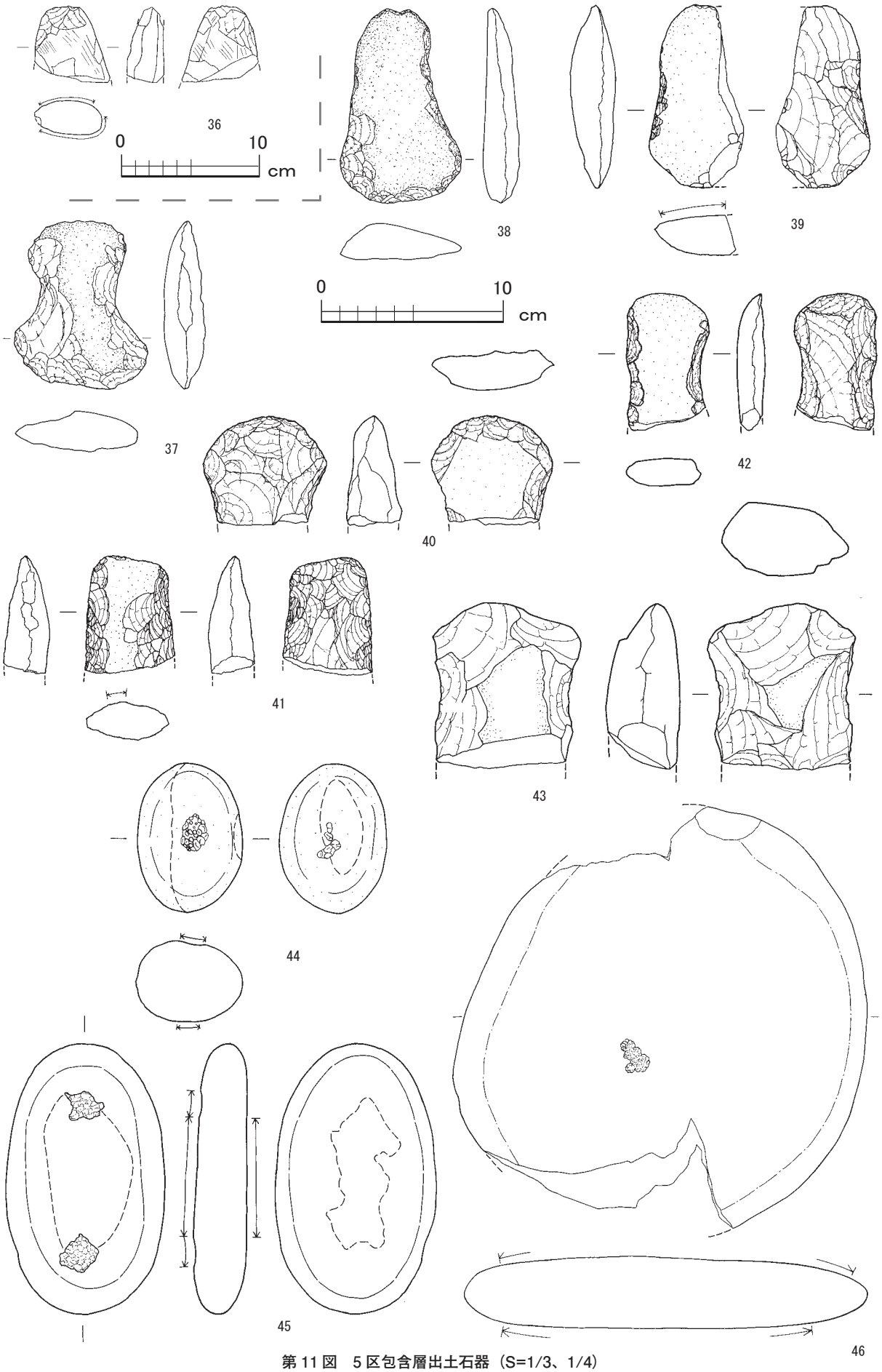
SX402 は SD404 に直交する位置関係にあり、幅広い落ち込みで濁暗黄灰色砂質土を埋土としている。



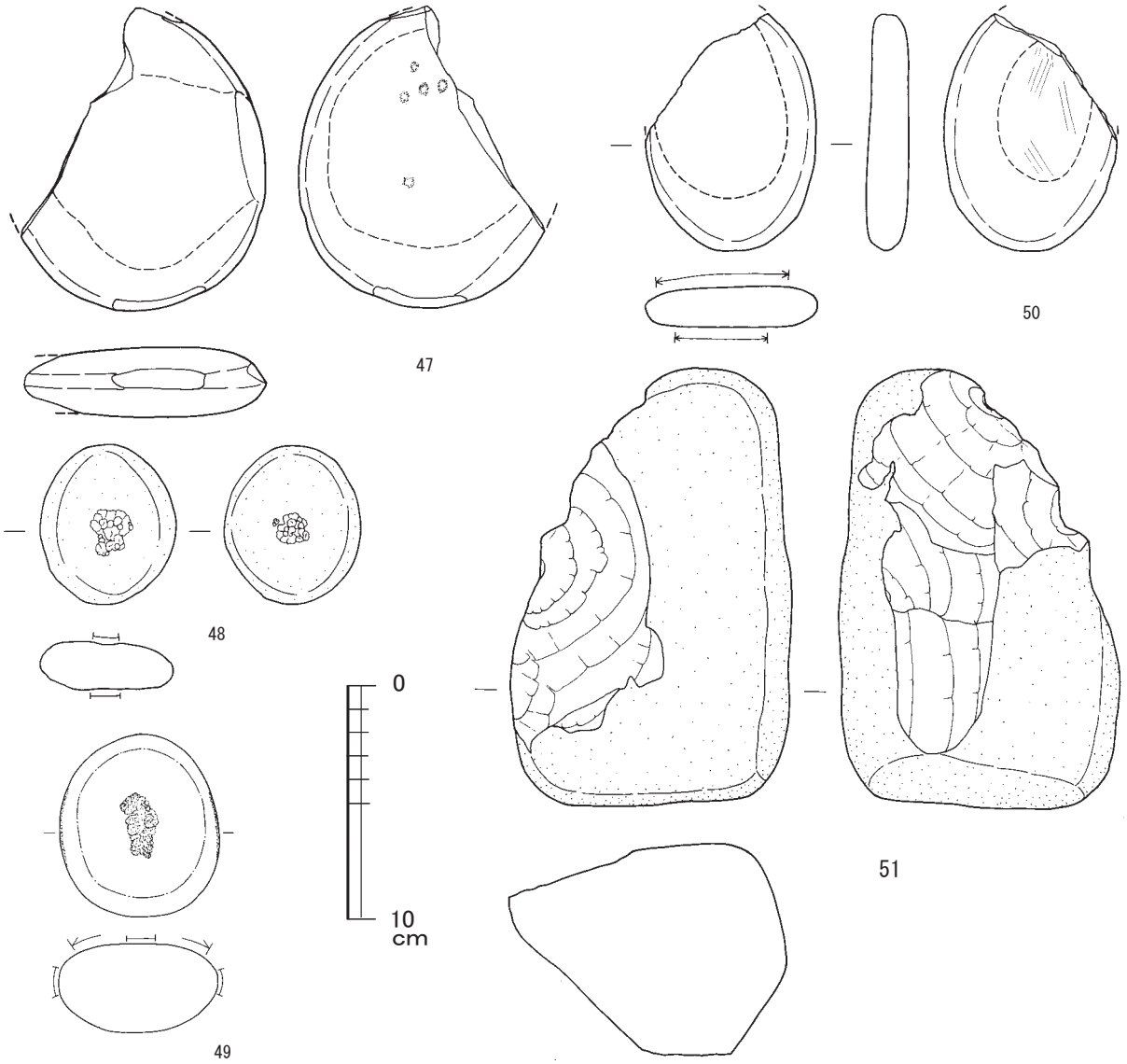
第９図　５区遺構全体図（S=1/80）と部分図（1/40）



第 10 図　５区土坑出土遺物と包含層出土土器（S=1/3,1/4）



第 11 図　５区包含層出土石器（S=1/3、1/4）



第 12 図　５区およびその他調査区出土石器（S=1/4）

ピット 404 はその下面にあり、柱穴であろうか？中世配石遺構は SX402 埋没後に作られている。きわめて狭い範囲で検出されたので正確さを欠くが、５つの土坑の切り合いとさらに SD406 が土坑となる可能性もある。SD406 を溝と判断した理由は、暗灰色粗砂を落ちの傾斜にあることからである。

401 号坑は最も上層に位置し、深さ 30cm の浅い皿状の落ち込みである。石が多い。402 号坑は 405 号坑に切られるように断片のみの検出である。単純な堆積状況でない。403 号坑は SD406 と大きく重複し、土坑底に焼け石を含み 10 ～ 30cm 大の礫がある。この配石に混じって土器およびバンドコが出土している。404 号坑は西壁面でしか確認できていない。人頭大の石を下部に含み、底も不定である。405 号坑は 403 号坑下に位置し、青灰色粘質土を埋土とする。礫は含まない。これら土坑内部から風化した骨片がそれなりに出土したことから、墳墓遺構と考えられる。

下層

溝やピットを検出した。SX401、SD401・405 とそれに重複するピットが弥生時代の遺構である。それ以外は縄文時代に属し、浅い落ち込みである。縄文時代の石器がわずかに出土した。

14 は加賀焼壺口縁で、端部が立って面を持つ。15 は珠洲焼鉢底部で、おろし目はないが内面が磨り減っている。底面に静止糸切り痕がある。16 は加賀焼壺肩部で押印がある。押印は、中央に花文で

左に小さな斜め格子、右に四角の枠を持つ格子の文様と思われ、湯上谷窯の分類Ⅱ 301 に相当する[1]。17 は弥生土器高杯で、内外面きれいにヘラミガキされている。後期後半の時期である。18 は石冠である。側面が敲打によって細くしており、底面が内湾する。頭部にはほとんど手が加えられていない。19 は打欠石錘で、打ち欠き部は図面の上のほうしかなく、もう一方端は大きく破断している。未製品であろう。18・19 は他の調査区出土縄文土器と同時代である。

5 区

長さ 17 mの調査区で、昭和 51 年調査区検出中世溝の延長と縄文時代晩期の土坑を 9 基確認した。これらの土坑は、縄文時代の遺物を包含する暗灰色砂質土下から掘り込んでいる。どの土坑も調査区に半分かかっているようなので、土層断面のためののセクションを設けなかった。土坑として番号をつけたものと、ピットとして番号をつけたものがあるが、検出時の大きさの違いによる。

縄文時代

ピット 501 は長さ 90cm、深さ 10cm で二つの穴が切りあっているのか瓢形となっている。一方の穴の直径が 65cm である。炭粒が混ざる濁青オリーブ灰色を埋土としている。上面にはピットから南東に隣接して配石があり、ピットに一連の遺構である。したがって、ピット 502 と同じように、配石を伴う掘り込みはより上層にあり、ピット部分は配石土坑の最深部にあたる。石器 3 として取り上げた大型の磨石などが配石中にある。

ピット 502 は半径 40cm、深さ 10cm で灰褐色砂質土を埋土としている。上面にはピットから東に接するように配石があり、ピットに一連の遺構である。したがって、ピット 501 と同じように、配石を伴う掘り込みはより上層にあり、ピット部分は配石土坑の最深部にあたる。配石中に石器 1・石器 2（50）を混入する。

SK502 と 508 は重複し、SK508 が新しい土坑である。SK502 として掘りはじめ、SK508 の輪郭を確認した後は二つの遺構として認識したので、上のほうにある配石がどちらの遺構に伴うかの帰属の認定は難しい。SK502 は直径 95cm、深さ 70cm で、暗黄灰色砂質土と暗茶褐色土を埋土とする。SK508 は濁灰褐色砂質土である。配石中に石器 9（25）や石器 12（24）が混ざっている。

20 は壷頸部で内面に粘土積み上げ痕跡がある。上部が擬口縁となっている。21 は浅鉢で工字状の文様を持つ。内外面ともきれいにナデられている。22 は打製石斧で基部と刃部の一部を欠損する。主要剥離面側から見ると大きな剥片で、縁辺に細部調整を施す。23・24 は磨石。25 は打製石斧刃部側半分で、大型である。撥のような形状である。

SK503 は長さ 90cm、深さ 30cm で、濃暗灰色砂質土や濁茶灰色土で、底に青緑色砂質土が薄く堆積している。断面では、SK503 上面にあたる位置に石器 8 を含む配石には掘り込みを伴うことから、別遺構と考えられる。26 は打製石斧基部で、刃部側半分を欠損する。作りかけで破損した未製品である。27 は打製石斧刃部側半分で、一部を欠損する。

SK504 は直径 1 m、深さ 60㎝で、上層から灰褐色砂質土、茶褐色砂質土、炭化物を含む暗茶褐色砂質土という層序で、レンズ状の堆積である。興味深いことは、西からの土の流入が顕著で、周囲から等しく埋没していないのである。配石はない。

SK505 は長さ 45cm、深さ 50cm の三角形を呈し、炭混じりの茶褐色砂質土を埋土としている。北端に配石がある。

SK506 は直径 80cm、深さ 50cm で、土坑の中位の深さまで配石がある。灰色砂質土で、下層に淡黄灰色砂質土がある。この配石には、石器が含まれていないようである。

SK507 は SK506 に一部接し、直径 70cm、深さ 15cm と浅い。炭混じりの暗灰褐色砂質土を埋土とし、

石器４を含む配石が上面にあり、SK506 と接する部分を中心に土器が出土した。28 は屈曲する浅鉢で眼鏡状浮文がある。29 は磨滅する面があるので磨石と思われるが、小さな窪みがいくつもあり敲石として使われた時の痕跡である可能性があり、複数の用途が考えられる。

縄文時代包含層出土遺物

縄文土器は僅かしか出土していないが、石器は配石に混交して出土するなど、土器量に比べて多い出土量である。30 は深鉢体部で、内面に炭化物外面に火熱を受けた痕跡がある。31 は突帯文系壷口縁である。口径 12cm と小さいが、小破片なので確定的でない。32 は波状口縁の浅鉢。波頂部内面に棒の刺突による二つの円形凹みがあり、その下に幅広の沈線が口縁のラインに平行してある。外面にススのような黒色がある。33 も波状口縁の浅鉢で、内面に幅広の沈線がある。34 は浅鉢の屈曲部分である。屈曲部の頂部に刺突紋があり、その下部に刺突にあわせて円弧文がある。屈曲下部には沈線で区画されたくずれた工字状文がある。35 は浅鉢の屈曲部で工字状の文様がある。

36 は小型磨製石斧の基部と思われる。ここに小さな剥離が見られ、敲打によるとすればクサビの用途が考えられる。37 は刃部が小さな剥離で欠損しており、使用痕であろう。38 は基部未調整で、未製品であろう。39 は半分を欠損している。刃部・基部とも未完成である。43 は主要剥離面がなく両面に自然面を残し、粗割段階で折れたのであろう。44 は敲石で両面に窪みがある。45 は磨石とともに敲石としても用いている。細長い磨面の両端部に窪みがあり、叩き割る行為と磨る行為が一連の作業でおこなっているのであろう。46 は大型の磨石で中央に１箇所窪みがある。

47 は磨石で、一方面に小さな窪みが５箇所以上見られ、敲打によるものである。48 は凹石で両面中央に幅約３cm にわたって窪みが作られている。49 は敲石と磨石のふたつの用途として使われている。敲打による窪みは一方面中央と両長側縁中央にあり、多様な用途に用いられたのであろう。50 は磨石で両面中央に磨り面がある。51 は打製石斧の母岩である。ほぼ直方体に近い石材の一つの頂部に打撃を加えて剥片を採取する。思ったとおりの剥片が得られなかったことから、捨てられたのであろう。

その他の時代

中世の遺構である SD501 は、幅 1.2 m深さ 0.6 mで床土直下から切り込まれている。黒灰色粘質土、黄灰色砂質土そして SK501 と同じ埋土である青灰色粘質土が下層にある。SK501 とは切り合いがあるがほぼ同時期の遺構である。遺物の出土はないが、昭和 51 年調査の中世溝の延長にあたる。

６・７区

６区は長さ 20 mの調査区で、表土床土下には地山としての礫層となっている。７区は長さ９mの調査区である。土層の状況は６区と同じで、遺構はきわめて希薄である。縄文時代の遺構はない。

註

１　小松市教育委員会　1990 『湯上谷窯発掘調査報告』

第２表　出土遺物観察表

報告番号	地区	出土地点	器種	法量	胎土	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	実測番号	備考
1	1区	包含層	白磁碗	口径18.0、現存高3.8		灰白色	灰白色		ケズリ	D1	越州窯
2	1区	SK101	土師器皿	口径8.2、底径4.7、器高1.6	細砂含む	橙	橙			D2	
3	3区	西から6.8m	壺	口径26	長石、石英、雲母	鈍い黄橙色	灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	D7	
4	3区	西から6.8m	浅鉢	口径27.2、現存高3.3	石英基調、海面骨片	浅黄橙色	灰黄色	ナデ		D17	口縁部内側に3条の凹線
5	2区	東から14m	深鉢	口径34、体部径36.8、現存高32.3	流紋岩基調、灰チャート主体	灰黄褐色	暗褐色	ナデ後ケズリ	条痕、上半部は後ナデ	B1	
6	2区	東から14m	深鉢	体部最大径44.6、現存高26.1	石英基調、雲母、石英、長石	鈍い黄橙色	灰黄褐色	ナデ	条痕	D18・25	体部最大径付近外面にスス、底部近くに炭
7	2区	東から16m	鉢	口径14.6、現存高7.7	長石	暗褐色	褐色	ナデ	条痕後ナデ	D8	海面にスス、内面に炭化物
8	2区	東から12m	深鉢		石英基調、海面骨片、シャモット	灰黄色	暗灰黄色	ナデ	条痕	D22	口縁端部に不明確な凹線
9	2区	東から14m	深鉢		長石、チャート	灰黄色	灰黄色	強いナデ	条痕、口縁近く後ナデ	D21	
10	2区	東から14m	深鉢		石英基調、海面骨片含	黄灰色	暗黄灰色	ナデ	ナデ、条痕	D24	沈線より上部は条痕ナデ消
11	2区	東から14m	深鉢		流紋岩基調、	鈍い黄橙色	浅黄橙色	ナデ	条痕	D20	外面にスス
12	3区	東から14m	深鉢		長石、チャート、シャモット	灰黄色	灰黄色	ナデ	条痕	D23	屈曲部より上部にスス
13	2区	東から14m	鉢	口径20、現存高5.5	石英基調、海面骨片、チャート	暗灰黄色	灰黄褐色	ナデ	条痕	D19	2本沈線、外面にスス
14	4区	402号配石下(墓坑)	加賀焼壷	口径42.4、現存高8.5		灰褐色	灰褐色			D4	
15	4区	404号配石土器1	珠洲焼鉢?	底径9.9、現存高7.1	精緻	灰色	灰色	ナデ	ナデ	D5	内面が磨滅
16	4区	SX402	加賀焼壷		黒色微粒	明灰色		ナデ	押印	D3	外面釉
17	4区	包含層	弥生・高杯		長石、石英微粒	灰黄色	灰黄色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	C1	杯部稜に接合痕
20	5区	SK502	壺		長石、シャモット	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色			D9	上端偽口縁
21	5区	SK502	浅鉢		流紋岩基調？、石英	灰黄色	鈍い黄橙色	ナデ	ナデ	D10	
28	5区	SK506	浅鉢		流紋岩基調、黒チャート、長石	暗灰黄色	灰黄色	ミガキ		D11	黒チャート(辰口)
30	5区	包含層	深鉢	体部径	石英基調	灰褐色	灰褐色	ナデ	条痕	D14	
31	5区	包含層	壺	口径15.4	石英基調、長石	黄灰色	明黄褐色	ナデ	ナデ	D13	突帯文系
32	5区	包含層	浅鉢		流紋岩基調、長石、シャモット	浅黄橙色	黒色	ナデ	ナデ	D16	頂部内面に刺突文と凹線、外面にスス
33	5区	包含層	浅鉢		流紋岩基調、黒チャート、長石、石英	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	ナデ		D15	内面に凹線
34	5区	包含層	浅鉢		石英基調、シャモット	鈍い黄橙色	鈍い褐色	ミガキ		D6	
35	5区	包含層	浅鉢		長石、シャモット	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ		D12	外面ベンガラ塗布？

報告番号	地区	出土地点	器種	法量	石材	特徴	実測番号	備考
18	4区	包含層		長さ10.0、幅6.2、厚さ4.7、重さ374g	流紋岩	下面は平坦、両側縁は敲きによって整形	石4	呪具か
19	4区	包含層	石錘	長さ7.0、幅5.5、厚さ2.1、重さ89g	火山礫凝灰岩	一方端面の打ち欠き未了	石35	未製品
22	5区	SK502	打製石斧	長さ11.9、幅6.9、厚さ2.6、重さ217g	安山岩		石23	一部欠損
23	5区	SK502	磨石	長さ8.2、幅7.6、厚さ4.5、重さ407g	デーサイト質火山礫凝灰岩		石29	
24	5区	SK502、石器12	磨石	長さ13.1、幅11.0、厚さ6.4、重さ1250g	細粒砂岩		石39	一方面のみ熱を受けて黒く変色
25	5区	石器9	打製石斧	長さ12.7、幅14.2、厚さ4.5、重さ732g	流紋岩質火山礫凝灰岩		石32	基部欠損
26	5区	SK503石器10配石下	打製石斧	長さ9.6、幅8.6、厚さ1.8、重さ150g	流紋岩質火山礫凝灰岩		石25	基部欠損
27	5区	SK503石器10配石下	打製石斧	長さ12.8、幅9.7、厚さ2.2、重さ281g	火山礫凝灰岩		石24	基部欠損
29	5区	SK507石器11	磨石	長さ11.1、幅7.5、厚さ4.0、重さ420g	中粒砂岩	直径数ミリの凹部多数	石28	敲石を兼ねる、熱を受けて一部黒く変色
36	5区	包含層	磨製石斧	長さ4.2、幅4.1、厚さ2.0、重さ39g	デーサイト質火山礫凝灰岩	基部のみ、クサビとして再利用	石22	
37	5区	包含層	打製石斧	長さ12.1、幅9.7、厚さ3.0、重さ300g	火山礫凝灰岩		石2	
38	5区	包含層	打製石斧	長さ14.0、幅8.7、厚さ2.6、重さ306g	火山礫凝灰岩	刃部摩滅	石3	
39	5区	包含層	打製石斧	長さ13.3、幅6.8、厚さ3.4、重さ280g	安山岩	一方側縁欠損、製作不良品か	石38	
40	5区	包含層	打製石斧	長さ7.9、幅8.9、厚さ3.6、重さ282g	火山礫凝灰岩		石31	刃部欠損
41	5区	包含層	打製石斧	長さ8.5、幅6.5、厚さ3.4、重さ225g	デーサイト質火山礫凝灰岩		石26	刃部欠損
42	5区	包含層	打製石斧	長さ9.9、幅6.0、厚さ2.1、重さ173g	安山岩		石21	刃部欠損、熱を受ける
43	5区	包含層	打製石	長さ12.0、幅10.8、厚さ5.4、重さ756g	祖粒砂岩	両面に自然面残す	石30	未製品？
44	5区	配石下土器10	凹石	長さ10.7、幅7.8、厚さ5.8、重さ695g	祖粒砂岩	両面中央に敲打による凹部、両小口敲打	石37	熱を受けて黒く変色
45	5区	包含層	磨石	長さ19.6、幅11.7、厚さ3.9、重さ1400g	祖粒砂岩	一方面に2ヶ所の敲打痕	石34	
46	5区	包含層	磨石	長さ30.5、幅30.2、厚さ5.2、重さ6650g	安山岩	中央に敲打痕	石5	熱を受けて黒く変色
47	5区	石器6	磨石	長さ17.1、幅13.9、厚さ4.0、重さ1087g	祖粒砂岩	一方面に敲打痕、よく使っている	石33	
48	5区	包含層	磨石	長さ9.0、幅7.7、厚さ2.8、重さ270g	祖粒砂岩	両面の中心にそれぞれ敲打による凹部	石27	
49	5区	包含層	凹石	長さ10.2、幅9.0、厚さ5.0、重さ670g	祖粒砂岩	中央と両側縁に敲打による凹部	石1	
50	5区	石器2	磨石	長さ13.4、幅9.9、厚さ、2.3、重さ428g	中粒砂岩	両面中央磨り減り	石36	
51	―	―	母岩	長さ24.7、幅15.7、厚さ12.0、重さ5300g	火山礫凝灰岩	一側縁から打撃を加えて打製石斧片をとる	石40	

第４章　総　　括

昭和 51 年度調査[1]から十数年後に隣接地を調査することとなった。昭和 51 年当時と今回報告時の埋蔵文化財保護体制の違いから、発掘調査を要する範囲に違いが生じたが、より充実した体制の下で遺跡の広がりをより正確に把握できたのである。ところが、歩道拡幅というきわめて狭長な調査区となったことにくわえ、物理的に調査できないような障害が多々あり、調査対象面積のすべてを調査できなかったことが残念である。

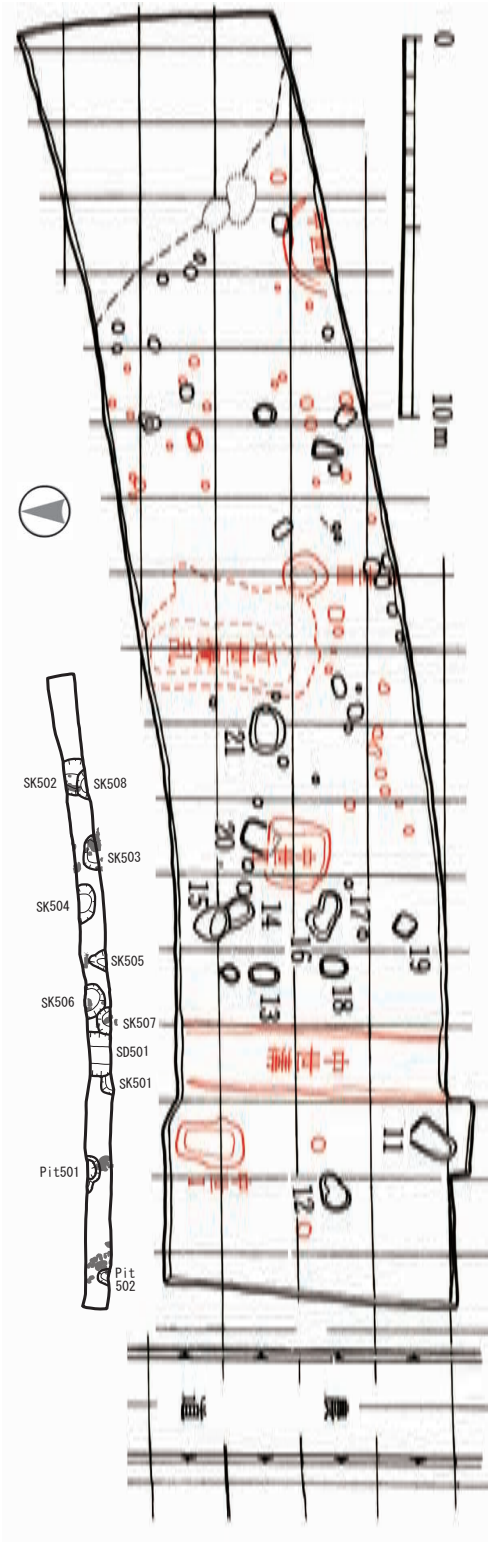
遺構について

長竹遺跡の主要な遺構は、鎌倉時代を中心とする中世と縄文時代晩期に限られ、弥生時代後期後半の時期は点的な存在である。

縄文時代の遺構は５区で検出した配石土坑に限られ、２区でこの時期の鞍部を想定して付近における人の居住活動を推測した。５区は昭和 51 年調査区で確認した縄文時代土坑の広がりと一致した。

土坑内部から砕片と化した人骨片を出土していることから、埋葬施設であることは確実である。土坑の大きさは概ね１ｍ大でその上部に配石がある。正確には、この配石は土坑上部にちょうど重なるようにあるのは SK508 がある程度で、多くが穴の周囲に存在する。また、SK504 では西からの土の流入が顕著で、木蓋の想定も可能かもしれない。このような特徴から想定される配石土坑は、土饅頭になった土坑の上部の周りに石を置いている形態である。ここで用いられた石は周囲で簡単に手に入れることのできる川原石とともに、集落で使われた石器も出土している。これが単なる廃棄の一方法なのか、それとも「墓」という性格からくる被葬者へのお供え的な意味を持つのか、あるいはまた偶然なのか、類例を調べていないのでにわかに判断できない。

また、切りあいのある配石土坑が少ないという特徴もあげることができる。地表面に配石という目印があるから当然といえようが、土饅頭となっていることが予想されることも大きな目印となろう。そしてまた、このような目印が常に視認できることが重要であり、草木の繁茂や土砂の堆積を防ぎその維持のために日常的な手入れが行なわれたことが想定できるだろう。



第 12 図　昭和 51 年調査区との合成

人の居住域を確認できなかったが、２区で底部を含む土器が多数出土していることから、周辺における居住を想定できる。２区より西に地形が下がることや鞍部東岸に土器が出土していることより、３から４区にかけて居住域が想定可能である。そして、現在の長竹集落部分が地形的に高いことから、この部分もまた居住域の候補になる。これらを最大としての面積は東西約 100 m南北約 50 mにも及ぶことになり、大きな集落規模となってしまう。現実的にはもっと小さく、竪穴住居数棟で構成された集落であれば金沢市藤江Ｃ遺跡で検出した数百㎡程度の広さであろう[2]。

遺物について

北陸における縄文時代後晩期の土器研究は、御経塚遺跡や新保チカモリ遺跡などの調査によって、きわめて充実している。そのうちの関連する研究のみあげれば、以下のようになろう。

昭和 51 年調査の報告で中島俊一氏は、下野式の概念を整理した吉岡康暢氏の縄文時代晩期の土器研究[3]をベースとして、下野式の新しい様相すなわち大洞Ａ式併行期と位置づけた。その後、久田正弘氏は大洞系・突帯文系など土器編年を整理し、下野式－長竹式－（乾式）－柴山出村式という変遷に理解した[4]。近年では、酒井重洋氏が研究史を整理した上で、北陸東部と西部の編年を整理し、長竹式を下野式の新相として縄文時代最終末の土器形式としている[5]。

今回報告する土器の編年的な位置づけは、中島氏による基礎的な理解や先学の諸研究を変更するものでなく、その資料の厚みを増やしている。特に、晩期最終末の土器型式としての下野式を「長竹式」として型式区分する久田氏の見解と、下野式の段階差として理解する酒井氏との違いは、研究の軸足を弥生におくかそれとも縄文におくかの違いであろうか。つまり、突帯文から遠賀川系に変化する過程を重視しその背景となるの水稲農耕という生業形態への傾斜を重視するのが久田氏であり、反対に、縄文土器の継続性を重視するのが酒井氏であるといえようか。また、研究の軸足を石川県におくか富山県におくかの違いでもあろうか。しかし、久田・酒井両氏とも長竹式を中屋式の影響が消えた土器型式と把握している。

石器の中で、未製品と思われる資料や打製石斧の母岩があり、昭和 51 年調査で未確認の事項である。特に打製石斧の製作技術が野々市町粟田遺跡で明らかになって[6]以降、自然石と見ていた礫がその母岩であったり、あるいは残核であることがわかってきた。今回の確認もそのような研究の深化によるものである。粟田遺跡では、打製石斧製作場所であることが明らかとなったものの、製作者の集落を検出していない。長竹遺跡の場合、これら未製品とともに、石冠が二つの調査をあわせて３点出土したことや、昭和 51 年調査で鰹節形石器などの呪具もまた出土していることから、扇状地における豊富な石材を背景とした自給自足的石器製作を見ることができるだろう。

註

1　中島俊一　1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会

2　布尾和史ほか　2002『藤江Ｃ遺跡』Ⅳ・Ⅴ石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター

3　吉岡康暢　1971「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第 56 巻第４号　日本考古学会

4　久田正弘　1991「北陸地方西部の大洞Ｃ２式～大洞Ａ’式直後の土器編年」『第１回東日本埋蔵文化財研究会　東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会

5　酒井重洋　2008「下野式土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編『総覧　縄文土器』刊行委員会

6　岡本恭一　1991「石製品」『粟田遺跡発掘調査報告書』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

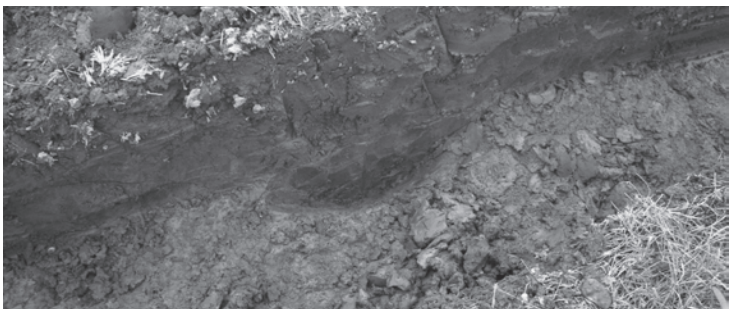
図版１

１区　建物跡

１区　全景

２区　全景西から

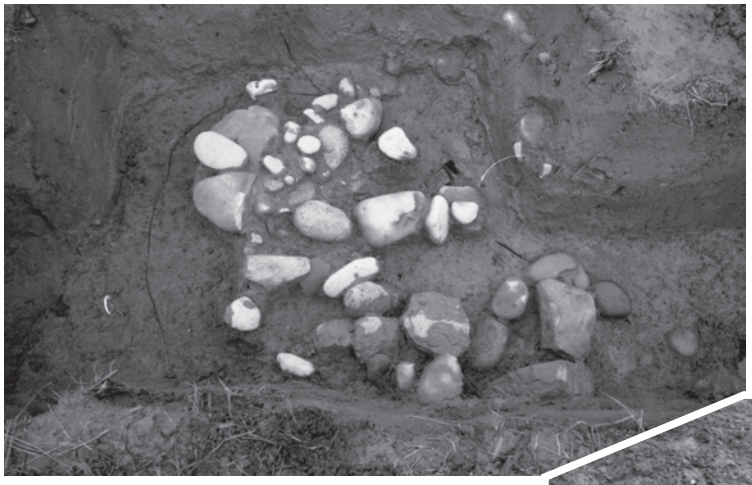
３区　全景西から



３区　中世土坑

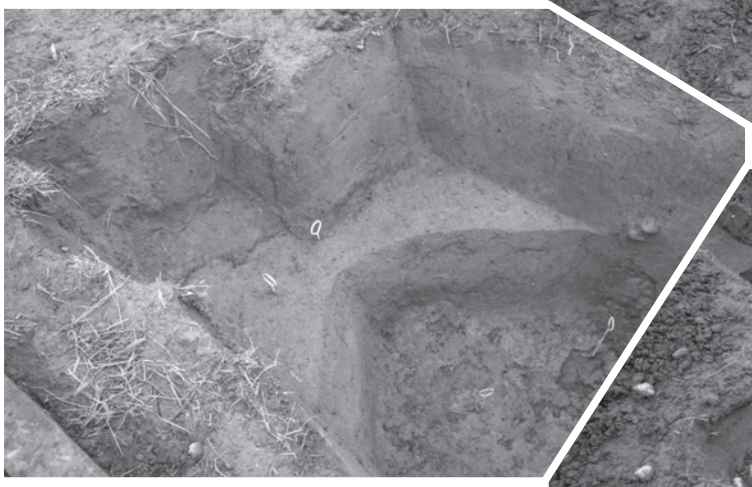
４区全景西から

４区東端



４区中世配石検出

４区中世配石西から



４区中世配石完掘

４区 SK402 号など

図版 3

５区全景土坑群

５区全景西より

５区全景ピット等

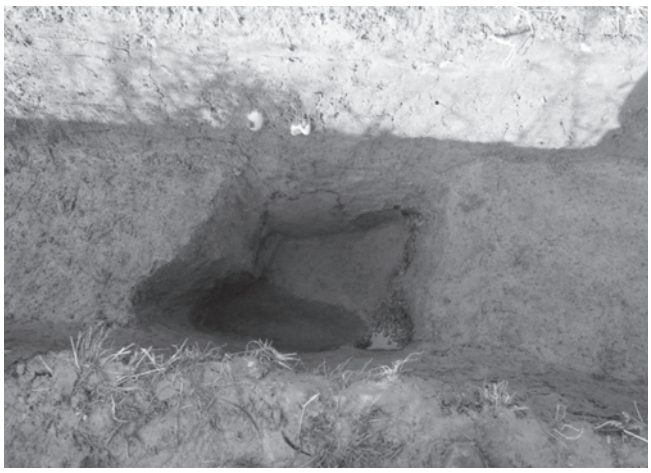
ピット 501

ピット 502

SK501

SK502

SK503 上面



SK502・508 完掘

SK503 上面（上）
同上完掘（下）

SK503 拡大

SK504 完掘

図版 5

５区 SK506・507

５区 SK506 配石（上層と下層）

５区 SK507 周辺

６区全景西から

７区全景東から

3
4
11
12
7
9
13
6
5

図版 7

43
22
51
42
27
25
41
48
29
50
40
45
47
26
24
44
46

ふりがな	はくさんし　ながたけいせき
書名	白山市　長竹遺跡
副書名	県単交通安全事業一般県道矢作松任線にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤雅文・中泉絵美子
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地１　TEL076-229-4477
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （新）	東経 （新）	調査期間	調査面積	調査原因
ながたけいせき 長竹遺跡	いしかわけん 石川県 はくさんしながたけまち 白山市長竹町 地内	8159	32070	36度 31分 13秒	136度 35分 8秒	19901107～ 19901214	800㎡	一般県道矢作松任線交通安全施設等整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長竹遺跡	集落跡	縄文時代	配石遺構	縄文土器・石器	晩期の墳墓としての配石遺構と、居住域を推定
		室町時代	建物跡、溝	土師器、越州窯系白磁、珠洲焼、加賀焼	

要約	縄文晩期後半の遺跡で、昭和51年調査地に隣接する。配石遺構を９基確認し、内部から人骨片が出土していることから、墓であることは明らかである。配石は墓の標識としてあり、石器も混入する。居住域はそれより北・西に広がることを予想した。「PDF」あり。

白山市　長竹遺跡

発行日　平成21（2009）年3月31日

発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076-225-1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076-229-4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷　鵜川印刷株式会社
〒923-0053　石川県小松市河田町丁33番地